2023年9月3日  川越教会

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　丸山　勉

私たちの人生の物語（1）

［創世記8章1節～22節］

神は、ノアと彼と共に箱舟にいたすべての獣とすべての家畜を御心に留め、地の上に風を吹かせられたので、水が減り始めた。また、深淵の源と天の窓が閉じられたので、天からの雨は降りやみ、水は地上からひいて行った。百五十日の後には水が減って、第七の月の十七日に箱舟はアララト山の上に止まった。水はますます減って第十の月になり、第十の月の一日には山々の頂が現れた。四十日たって、ノアは自分が造った箱舟の窓を開き、烏を放した。烏は飛び立ったが、地上の水が乾くのを待って、出たり入ったりした。ノアは鳩を彼のもとから放して、地の面から水がひいたかどうかを確かめようとした。しかし、鳩は止まる所が見つからなかったので、箱舟のノアのもとに帰って来た。水がまだ全地の面を覆っていたからである。ノアは手を差し伸べて鳩を捕らえ、箱舟の自分のもとに戻した。更に七日待って、彼は再び鳩を箱舟から放した。鳩は夕方になってノアのもとに帰って来た。見よ、鳩はくちばしにオリーブの葉をくわえていた。ノアは水が地上からひいたことを知った。彼は更に七日待って、鳩を放した。鳩はもはやノアのもとに帰って来なかった。ノアが六百一歳のとき、最初の月の一日に、地上の水は乾いた。ノアは箱舟の覆いを取り外して眺めた。見よ、地の面は乾いていた。第二の月の二十七日になると、地はすっかり乾いた。神はノアに仰せになった。「さあ、あなたもあなたの妻も、息子も嫁も、皆一緒に箱舟から出なさい。すべて肉なるもののうちからあなたのもとに来たすべての動物、鳥も家畜も地を這うものも一緒に連れ出し、地に群がり、地上で子を産み、増えるようにしなさい。」そこで、ノアは息子や妻や嫁と共に外へ出た。獣、這うもの、鳥、地に群がるもの、それぞれすべて箱舟から出た。ノアは主のために祭壇を築いた。そしてすべての清い家畜と清い鳥のうちから取り、焼き尽くす献げ物として祭壇の上にささげた。主は宥めの香りをかいで、御心に言われた。「人に対して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい。地の続くかぎり、種蒔きも刈り入れも 寒さも暑さも、夏も冬も　昼も夜も、やむことはない。」

[1] 真剣な「ノアの方舟」物語

今日のメッセージのタイトルを「私たちの人生の物語」としました。読んで頂いたのは、いわゆるノアの方舟の物語の箇所です。聖書は創世記の6章から9章まで使って、まるでその事柄を客観的に見ている人が記録しているかのような書き方をしています。これはお伽噺や創作物語、或いはスペクタクルな神話というような捉え方では収まらない、強くて真剣なメッセージがあるように私には思えます。どういうメッセージでしょうか。私は、「あなたはもう既に洪水や嵐をくぐり抜け、神が下さる約束の場所に導かれている。神を畏れ、それを感謝せよ」というメッセージだと思います。そしてその時によく注意しなければいけないことは、私たちが今神様の御手の中にあるというのは、私たちが真面目で、神様を信じる恭しい心を持っているからなのだ、洪水で滅ぼされてしまうような、神を恐れないそんな不届き者とは違う、神様は私に元々救いを用意して下さったのだ、というようなことではない、ということです。私は本当に恥ずかしい話なのですが、若い時は全く思い違いをしていました。自分が信仰を持つことが出来たのは、私が自分のどこかにピュアーな部分があって、それを神様は受け入れて下さったのだ、と思っていたのです。しかし、それはとんでもない高慢な考えであることが後で分かってきました。もしそうであれば、それはキリスト不在の信仰です。

[2] ノアとその家族

さて、ノアという人物はどういう人物だったのか、よくは分かっていません。大体彼のセリフ（言葉）というのは、洪水の出来事の間は全く書かれていません。初めて彼の言葉が出てくるのは、不名誉な部分です。裸で酔っぱらってしまった彼がその姿を見つけた息子を呪う場面です（9:25）。まあ、高潔な人物と言うより、普通の親父・お父さんと言った方が合っているように思います。しかし彼を神様は選び、御業のために敢えて用いられました。これは大事な事だと思います。

そもそもこの恐ろしい洪水物語ですが、色んな「謎」に包まれているように思います。或る意味、神様は矛盾しているように思います。6章の5節以下を見るとこう書かれています。「主は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのを御覧になって、地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた。主は言われた。「わたしは人を創造したが、これを地上からぬぐい去ろう。人だけでなく、家畜も這うものも空の鳥も。わたしはこれらを造ったことを後悔する。」 …神様は「心痛められた」のです。“神の似姿”である人間が見るに忍びない姿に堕ちてしまっている。そんな姿を見たくない。迷惑なのは動物たちですよね。人間と一緒に拭い去ってしまうことを神は一度は考えたのです。でも謎なのは、一息にしてこの世界と人間を滅ぼすことも神様は出来たでしょうに、そうはなさならず、ノアという人物に方舟を造らせた。聖書はノアについて一言だけ語っています。6:8。「しかしノアは、主の好意を得た」と。他の訳では「恵みを得た」です。そう、一方的な神の恵みです。このカタストロフィー（破滅）の物語の中で、神様は、なお人類が生きて行く術を神様がご自身が準備し、人間との協同作業の中でそのみわざを進めて行かれたのです。凄いことではないでしょうか。

さて、もう一つの謎は、他の大多数の拭いさられた人々とノアの家族はどこが違うのか、ということです。神様はノアに目を留められたというのは良いとしても、この家族の信仰については実は何も書かれてありません。私は方舟に招かれなかった他の人々とノアの家族の違いが分かりません。「この時は、神様はノアの一族を、救いのモデルケースとして特別に扱った」という理解も出来るでしょう。しかしその解釈は現代人を苦しめます。故無く死んでしまう者はどう捉えたらよいのかという疑問はいつもあります。よく大きな災害などがあった時、たまたまいた場所で生死が分かれ、犠牲になったのが幼い子であったりしたら親は「私が代わりになりたかった」と、ずっとずっと苦しみを抱く訳です。このノアの家族が特別信仰深かったなどという記述は無いのです。謎です。…でも私は思います。この世界は謎だらけです。分からないことばっかり。残酷に思えることもある。このノアの造った舟は、そんな謎や、理不尽や、或いは痛みや悲しみを乗せながら進んで行きます。この舟の大きさが6:15以下に記されていますが、それはエルサレム神殿の大きさと同じ位だそうです。敢えて言うならば、ノアとその家族と棒物たちのこの舟は、「祈りの家」なのです。神様は、この世界を喜んで滅ぼすのではなく、1年以上の間(洪水の40日40夜だけではありません！)、この世界を痛みながら、祈りながら進んで行く舟を守り、巡ってくる新しい時代へと進み行かせたのです。じっと待つこと、祈ることをノアたちに託した。ノアたちは洪水が引いた時、喜び、畏れ、真っ先に祭壇を築き、主への応答の捧げものをしたのです。

[3] 罪の嵐の防波堤になったイエス・キリスト

皆さん、このノアの方舟が‟教会”であると想像して、川越教会はひたすら信じて待ち続け、互いを励まし合い、協力し合えるでしょうか？私自身はノアになれそうもないな、と思ってしまいました。しかしこの時、もしノアが苦しみながらも責任を担えたとしたら、それはノアの力ではなく、一緒に乗っている者たちの一致の故では無いか、私はそんなことも思ってしまいました。

そして皆さん、この洪水の物語は既に「起こった」のです。史実というよりも、もっと現実的と言って良い、霊的な意味で、です。私たちも救われたのは、ただ神様の一方的な恵みによっていますよね。そしてあまりこのようなことを言う人はいないかもしれませんが、私にはノアがイエス・キリストのひな型のように思えます。主は神様が提示された救いの方法を黙々と従い、洪水、嵐の中を進んで行きます。神様はそこに協力者も置いて下さった。この「嵐」は、言ってみれば「罪の嵐」です。神様はその嵐をいつか止めなければいけません。そうでないと、全ての者がその嵐の中に呑み込まれてお終いになるからです。ここで神様は恵みをもって決断されました。主イエスは、神の独り子として、この洪水や嵐の防波堤になって下さったのではないでしょうか？両腕を拡げて、あのエルサレム郊外の丘の上で罪の洪水を一身に受けて下さったのではないでしょうか。私たちへの愛の故に。私たちが負わなければならない（それにも鈍感で気付いていないのですが）、滅びの宣言（汝は死すべし！という呪い）を主ご自身が受けて下さったのです。ですからその先にあるものは、もう滅びなくてよい命、復活の命です！私たちは、もうそれを頂いているのです。

8:21以下に記されているのは、神様の、今の私たちに対する宣言です。ここには、イエス・キリストの復活に基づく大きな憐みの約束があるのではないでしょうか？―「主は宥めの香りをかいで、御心に言われた。「人に対して大地を呪うことは二度とすまい。人が心に思うことは、幼いときから悪いのだ。わたしは、この度したように生き物をことごとく打つことは、二度とすまい。地の続くかぎり、種蒔きも刈り入れも 寒さも暑さも、夏も冬も　昼も夜も、やむことはない。」

…何という幸いの中に私たちは置かれていることか！これが、私たちの人生のドラマです。私たちも、ノアとその家族に倣い、おのれを潔い献げものとして献げましょう。お祈り致します。

主よ、この日の礼拝を感謝致します。私たちを今日生かし、憐みの中に置いて下さっていることを感謝致します。「あななたがたには世で苦難がある。しかし、勇気を出しなさい。わたしは既に世に勝っている」（ヨハネ16:33）と主は仰って下さいました。私たちは既にあなたの大きな御腕に抱かれています。そのことを忘れて勝手にさまよう愚か者を赦して下さい。あなたが成し遂げて下さった救いのドラマの中に、自分を見、世界を見、また周りの者たちのためにとりなし祈る者とならせて下さい。そして、そのための私たちの教会の交わりであることが出来ますように。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。